

輿水 肇

こしみず はじめ



公益財団法人都市緑化機構 代表理事・理事長

昭和19年6月1日 東京都出身
同 43年 東京大学農学部 卒業
同 47年 東京大学大学院農学系研究科博士課程 単位取得退学
同 47年 東京大学農学部 助手
同 51年 農学博士（東京大学）
同 54年 明治大学農学部 専任講師
同 56年 明治大学農学部 助教授
平成 元年 明治大学農学部 教授（平成27年まで）
同 21年 財団法人都市緑化機構 理事長
同 25年 公益財団法人都市緑化機構 代表理事・理事長

昭和54年 日本造園学会 学会賞（論文調査部門）
平成20年 日本公園緑地協会 北村賞
同 26年 日本緑化工学会 学会賞（功績賞）
同 27年 日本造園学会 上原敬二賞
同 28年 日本公園緑地協会 佐藤国際交流賞

受賞者紹介

「都市における植栽基盤整備技術の開発」に関する功績

ヒートアイランド現象の緩和や生物多様性の保全等、緑化を通じた都市環境の改善が急務となっている。しかし都市は建築物が林立するばかりではなく、その土地の多くは、地下に構造物が埋設された人工地盤や、埋立地、造成地などの人工改変地が占め、植物を植栽することは容易ではない。さらなる緑化の推進のためには、人工地盤や埋立地などの人工改変地といった条件不利地といえども、植栽空間として積極的に活用することが必須となる。

興水氏は、こうした要請に対し、都市における植栽基盤整備技術の確立に先駆的役割を果たしてきた。その代表的な業績として、まず、土壌や植物の種類によって有効土層の厚さが異なることを捉え、地被植物が旺盛に生育を図る上で適正な有効土層の厚さを解明したことがあげられる。

また、土壌改良材を用い混合耕耘の深さを変えた植栽実験にもとづき、土壌改良資材を用いた場合の適正な有効土層の厚さを解明するとともに、樹木の場合には土壌量（容積）をも考慮しつつ適正な有効土層の厚さを考慮すべきことを明らかにした。これらの成果は、屋上緑化などの様々な人工地盤の緑化や、埋立地の緑化の現場において貴重な技術指針として活用されてきた。なかでも東京都や千葉県の臨海部埋立地における大規模公園（葛西臨海公園）や民間の大型テーマパーク（東京ディズニーランド）の造成における植栽基盤の整備に、興水氏の研究成果が応用されたことは特記される。

興水氏は一方で、丘陵地における住宅団地建設のための造成地における盛土の厚さを変えた緑化用樹木の植栽実験を通じ、無土壌岩石地における盛土工法による植栽地盤の造成が、緑化用樹木の植栽に対して有効であることを解明した。この成果にもとづき、日本造園学会に緑化環境工学研究委員会が組織され、「緑化事業における植栽基盤整備マニュアル」がまとめられたが、興水氏は同委員会の座長として、そのとりまとめについて中心的な役割を果たした。本マニュアルは現在もなお、全国の造園工事のスタンダードとして活用されている。

社会活動としては、日本造園学会会長などの様々な要職を歴任し、その間、造園CPD制度の立ち上げや都市の緑3賞の合同表彰式開催を主導することで、学会と実業界の垣根を越えた造園緑地分野の発展に貢献してきた。また2002年に日韓共同開催されたサッカー・ワールドカップに際しては、会場となった横浜国際総合競技場等における芝の造成管理の検討にも関わった。このように、自身の研究分野にとどまらず、わが国の造園緑地分野を常に牽引する役割を担ってきた。

これらの業績に対して、興水氏は、造園に関する優れた業績をあげるとともに広範な社会活動を通じて当該分野の発展・普及啓発などに顕著な貢献をした者に与えられる日本造園学会上原敬二賞、公園緑地分野において著しい功績のあった者に与えられる日本公園緑地協会北村賞などを受賞している。

以上のように、興水氏は人工地盤から埋立地、造成地等の人工改変地に至るまで、都市の多様な植栽基盤を対象に、その整備技術にかかわるスタンダードを構築し、わが国における同学術分野の牽引役を果たしてきた。加えて、広く造園緑地分野全体の牽引役をも果たしてきたというこれらの功績は、高く評価されるものである。